



P28\_Neutral (puzzled) sculpture ニュートラル(当惑)立体 2015  
 金属製構造物、ラテックス、プラスチック、ビニールにフラットベッド印刷  
 154×120×110cm  
 P29\_Neutral (confident) sculpture ニュートラル(自信)立体 2015  
 金属製構造物にパイプの分離体、ラテックスにフラットベッド印刷、ビニールにフラットベッド印刷 105×46×80cm  
 #EVIDENCE(証拠)プロジェクトより  
 Photo by Pim Top



アヌーク・クルイソフ

**Anouk Kruithof**



Wall of Fading Memory 消え行く記憶の壁 2012  
100枚の印画紙(Cプリント)、フォームボード、ナイロン糸、ポリスチレン  
900×300cm



Becoming Blue 青くなる 2006-  
 ダイボンドにCプリント サイズ可変



P34上\_Sweaty Sculpture(uneven) 汗ばんだ立体(不均一) 2015  
 ポリスチレンに写真、セロファン、スポンジ、偏光性のプレキシガラス 115×110×102cm  
 P34下\_Sweaty Sculpture (front) 汗ばんだ立体(前面) 2015  
 ポリスチレンに写真、セロファン、スポンジ、偏光性のプレキシガラス 101×65×100cm  
 P35\_Sweaty Sculpture (denim) 汗ばんだ立体(デニム) 2015  
 プレキシガラスにフラットベッド印刷、ポリスチレンに写真、セロファン、スポンジ、  
 偏光性のプレキシガラス 101×65×100cm





ダイアン・アーバスの影響が感じられる初期作品。セントヨーストアカデミー 卒業プロジェクト(2003)より

では、制作を通して取り組みたいと思うテーマに重点を置きながら、最終的な形式としてのパフォーマンス、写真、彫刻、インスタレーション、コラージュやビデオのように、作品は多様化されていきます。

### ひとつのイメージが私たちに示すことより、世界ははるかに複雑です。

「#証拠」プロジェクト  
—— 最近の制作について知るための実例として、「#証拠」(2015年)の膨大なプロジェクトについて聞かせてください。

式のアレンジが刺激的で、そこに自由を感じていました。  
—— アーバスのようにストレートにカメラを使うところからはじまりますが、その後最近のスタイルへどのようにシフトしていったのか教えてください。  
クルイソフ メデイウムには固執していませんし、写真だけに限って話をするということに興味を持っていません。おそらく写真は、私にとってはたんに出発点であったということです。アート・アカデミーでは、初めは写真と彫刻を学んでいましたが、彫刻学科は辞めることになりました。しかし卒業後、彫刻を学んでいたときに持っていた私の空間への感性がすぐに戻り、写真というメディアの限界について、疑問を持ち始めたのです。私は写真との愛憎関係を持ちつつ、現在

することが好きで、その立体作品のようなものも写真に撮っています。写真というメディアの基礎的な側面については、この写真のコースで学びました。実は私はずっと「国境なき医師団」に入りたいと思っていたので、薬学部へ進もうと考えていたのですが、次のステップとしての教育に、アート・アカデミーを勧められました。  
—— 当時は、どんなアーティストが好きでしたか？  
クルイソフ 私がポートレイトに夢中になった頃のヒーローは、ダイアン・アーバス

に興味を持ち始めました。  
もっとも写真家らしいことは、人に興味を持つということだと思っています。ですから私は、パフォーマティブなアクションのなかで、インタビュをしたり、コラボレーションをしたり、そこから人の写真を撮るといったことをしています。写真の価値や、その誠実さについて問題提起を始めたとき、写真はただ表面上のことにすぎないと理解するようになったのです。ひとつのイメージが私たちに示すことより、世界ははるかに複雑です。おそらくそのことが、私の作品がより多面的なものになっていったもうひとつの理由だと思います。アートをつくることは、非常に長いプロセスであり、全てのことは一歩一歩段階を踏んで行われます。写真だけを使って制作をするとき、自分の考えを表現するには何かが足りなかったのです。このことから、制作するメディアを拡大しました。

## 世界の複雑性を再構築する、イメージのアッサンブラージュ

社会に潜む問題を、「写真」を起点に、立体、パフォーマンス、彫刻、本、インスタレーションなど多種多様なイメージの構築物に転換していくクルイソフ。彼女の多岐にわたるプロジェクトから見えてくる、写真と世界の接合点。かないみき(アートジャーナリスト)聞き手・文

### 写真への問題提起

—— 初めてカメラを手にしたのは、いくつのおときですか？  
クルイソフ 13歳のときに、両親からカメラをもらいました。私が育ったオランダの街のカルチャー・センターに通いはじめたのが15歳で、彫刻の写真など、アートの本をよく見ていました。カルチャー・センターではフィルム写真を学び、モノクロ写真を自分で現像しましたが、このようなプロセスは、当時の私にとって魔法のようなものでした。また、何かをつくりたり組み立てたり

することが好きで、その立体作品のようなものも写真に撮っています。写真というメディアの基礎的な側面については、この写真のコースで学びました。実は私はずっと「国境なき医師団」に入りたいと思っていたので、薬学部へ進もうと考えていたのですが、次のステップとしての教育に、アート・アカデミーを勧められました。  
—— 当時は、どんなアーティストが好きでしたか？  
クルイソフ 私がポートレイトに夢中になった頃のヒーローは、ダイアン・アーバス

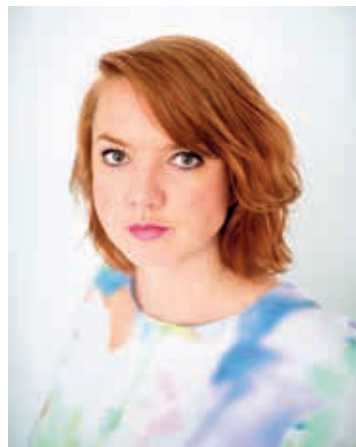


Photo by Marloes van Doorn

でした。彼女は目に見える社会の主流から、少し外れたアウトサイダーの生活に興味を持ち、彼らと会話を交わし、その生活には入り込みました。彼女の主題と非常に密接な関係のなかで制作をしていたことに、想像力をかき立てられました。そこには何か、とてつもない「正直さ」のようなものがありました。その後、ヴォルフガング・ティルマンスに関心が向かいます。彼も人物に興味を持っていますが、その作品には、彼自身のより親密な生活環境、例えばドイツのクイ・ア・シーンや、日々の生活の状況が撮られています。写真の配置方法や展示空間での形

## 写真による証拠が、現代において どのような意味を持ちえるか。

ためにメタル構造の異なる形状を発展させたのです。彼らはT S Aによってほかされ「ニュートラル」にさせられましたが、私の彫刻は、あらゆる種類の新たな人格、またはプラスチックに印刷されたその形状やメタルを横断する様子から、感情をもえたように見えます。

「「ニュートラルズ」はある意味、ポर्टレイトということでしょうか？」

クルイソフ はい。ばやけたIDカードの所持者である匿名の人々のリプレゼンテーションだからです。美しい色合いやチャタリングな私たちを持つこれらの彫刻ですが、背景には、プライバシーの問題や、政府機関が今日「私的なもの」をどのように扱っているのかといった問題提起があります。すべての「#証拠」プロジェクトの作品のために、持ち帰ることのできる小さな新聞広告のような印刷物も用意し、展示室の床に積んでいるので、このプロジェクトの背後にあるすべての物語を読むことができます。私はすぐには理解できないような作品をつくるのが好きです。それは、最初の段階では視覚的に感動させられることができ、作品が観客へアピールするとき、彼らが



「#証拠」シリーズ ポーヴェラーニ・ニスベン (アムステルダム、2015年)での展示風景  
Photo by Pim Top

クルイソフ 「#証拠」プロジェクトは、1977年に出版されたラリー・サルタンとマイク・マンデルの『Evidence(証拠)』(1979年)という本のアイデアをアプロプリエーションするところから始まりました。彼らはオリジナルの文脈を使わずに、既

その文脈へと飛び込み、より情報的で概念的なその背景を知ろうな状況をつくることです。私たちが日々目にしている素早く繰り返される画像の増大するストリームは、イメージをより利根的なものにし、それを解釈する方法は、より断片化しています。インターネットとソーシャル・メディアは、イメージの見方を変化させました。この「#証拠」プロジェクトの全体のテーマは、写真による証拠が、現代においてどのような意味を持ちえるかということです。

### 色と身体

「「ニュートラルズ」の色合いが印象的なように、あなたの作品のなかでは、色も重要な役割を持っていると思います。」

クルイソフ 作業をするのに、膨大な量のイメージがあれば、私はそのカオスを秩序立てるために色を使います。過去のプロジェクトでは、その歴史的な文脈や心理的な意味から、特定の色を選んで制作したのもあります。「青くなる」(2006〜2009年)では、青い背景に、青い服を着た人たちを撮影しています。空の静けさと関連させて、瞑想状態のようなものに言及し

のりサーチとファウンド・スクリーンショットからつくられています。その結果である最終的な作品は、私が始めたスクリーンショットのデータからは、非常に遠く離れて、それらをインスタレーション、彫刻、コラージュや写真へと変形させました。

「「ニュートラルズ」(2015年)という彫刻のシリーズは、米国での旅行者の安全に対する権限を持つ米国土安全保障省の機関、T S A(運輸保安局)のインスタグラムのアカウントの写真を利用した作品です。T S Aは、主に押収した武器や麻薬犬をポストしていますが、何しろクレイジーです。ぜひ見てみてください。それらのポストの中には、時に武器と一緒に、武器の密輸を行おうとした人物の、ほかされたIDカードが隣におかれて撮影された写真もありました。私はこのすべてのカードを切り取りました。アメリカでは、州ごとに異なる色のIDカードが存在するため、異なる色合いになります。これらのばやけたIDカードを、ラテックスやビニール、PVCといった柔軟性のある透明な素材に印刷しました。このカードを持つ匿名の人々に、新たな身体性を与えたかったので、彫刻をつくる



「#証拠」シリーズより  
ポーヴェラーニ・ニスベン (アムステルダム)での展示の際に配布した印刷物

たかったのです。これはパフォーマティブなポर्टレイトのシリーズで、撮影中に私はその対象者に対して、彼らがいる快適な状態から引つ張り出すような、あらゆるインタラクションを仕掛けています。針と風船と一緒に持つってもらったり、音や虫、感触を使ったりしながら、リモートコントロールで撮影しました。最終的なポर्टレイトは、まさに私が求めていたように、何が起ころる直前とまさにその直後の間の瞬間のようなものになりました。「何が起ころるのか?」という疑問符としてのポर्टレイト

## Anouk Kruithof's Artist Books アヌーク・クルイソフの 活動から生まれた4冊の本

イメージに潜む特異な物語性や記憶の再構築を促す、クルイソフのアーティストブックを紹介。



### 『THE DAILY EXHAUSTION』

Kodoji Press 2010年

汗まみれで感情があらわになった作家本人の、23点のポートレート写真から構成される小さな新聞用紙。ポートレートは洋服と背後の色を合わせており、疲労というひとつの感情に、グラデーションが加わり、さらなるインパクトを添えている。異なるポートレートを組み合わせ、壁に隙間なく並べたインスタレーションも発表。

### 『Lang Zal Ze Leven / Happy Birthday To You』

自費出版 2011年

患者やスタッフとともに制作することを目的とした、精神病院の敷地内にあるアーティストレジデンスに滞在したときのプロジェクト。10人の患者の誕生日の願い事についてのインタビューから引用したテキストや患者の顔写真、パーティーの様子により構成されている。オランダのドキュメンタリー写真の賞にノミネートされた。



### 『The Bungalow』

Onomatopoe 2014年

コレクター、ブラッド・フォイアーヘルムのカルト風な写真のコレクションから、そのイメージをデジタル化して切り貼りし、本を「バンガロー(小さな家)」に見立てて、その中へとあらゆる形式で入れ込んでいる。そこにはデスクトップ上に表示された画像のイメージも。作家は本作を、「画像のワンダーランド」としている。

### 『Automagic』

Stress press. bz / Editorial RM 2016年

タイトルのAutomagicは、オートマチックとマジックを掛け合わせた造語で、何か説明のつかない行動を意味する。過去13年間でクルイソフがiPhoneや小型のデジタルカメラで撮影し、アーカイブしたデジタル画像を、透明なアクリルガラスのボックス、すなわち「フォルダ」に色分けした9冊の本を収め、アナログ写真やス

リーションショット、複製や編集された画像など、「変換」された画像の概念を探る。それぞれの本にテーマはあるが、はっきりとしたストーリーは存在せず、イメージを放するように解釈できる。また、本書の制作にはクラウドファンディングのプラットフォーム、Kickstarterを利用している。



Push-up 腕立てふせ 2013 30×40cmの14枚の額装された写真と1枚の何も入っていない額、ループで投影されるスライドからなるインスタレーション。「Every Thing is Wave (すべては波のように)」シリーズより

「青くなる」のポートレイトの身体性もそうですが、写真との連携による人間性を感じさせます。このようなアプローチは、デジタルメディアの非人間性に対してパララ

トとなったのです。青色で言及したいことがあったので、その色を選びましたが、また一方で、私が色で制作するのは、絵画的な可能性もあります。色で物事の整理をするのは自然なことですが、色は人に精神的なインパクトを与えることもできると思います。

スを取るようなものなのでしょうか？  
クルイソフ 人間のデジタル化が進むに連れ、人間性についての懸念が助長することがあると思います。そして私たちは常に、自分のデジタルのペルソナと身体的なペルソナを行き来しています。私はアナログ

## 私たちは常に、自分のデジタルのペルソナと身体的なペルソナを行き来しています。

「あなた自身もインスタグラムのアカウ  
ントをお持ちですが、どう使っています  
か？」  
クルイソフ 個人的なダイアリーのよう  
なものではなく、制作の過程を見せるも  
のです。出版された本や、展覧会、自分の作品  
のドキュメントを見せる私個人のウェブサ  
イトのように、最終的な作品だけではなく、  
デジタル・イメージのプラットフォームと  
してパブリックへの直接的なアウトプット  
になるので、インスタグラムへのポストは  
アディクションのようなものでもありま  
す。そして新たなデジタル・アディクション  
による精神疾患が生まれていることも事実で  
すが、私にとっては興味深いことです。私た  
ち人間の感情とインターネットの影響は、  
私が関心を持つトピックであると同時に、  
この好奇心から生まれる何かが、新たに今  
後のプロジェクトのソースになるかもしれ  
ません。

### ● Profile

アヌーク・クルイソフ 1981年、ドルトレヒト生まれ。メキ  
シコシティに1年間、ニューヨークに住み、2009年ク  
ンストラーハウス・ベタニエ(ヘルリン、16年、キャラリ  
ジョー・ファン・デ・ロー(ミン・ヘン)など、シャロウ・テ  
ラー賞など多数の賞を受賞またはノミネートされてい